アウクスブルク滞在記

服部悠花

はじめに

長浜市青年使節団員として訪問したドイツのアウクスブルク市での滞在は、時間の経過を忘れるほど、学びや気づきの多い充実した時間となった。ここでは、様々な施設の訪問や現地の方との交流を通して学んだことや、感じたことについて記す。

１日目

ミュンヘン空港に到着した後、私たちはアウクスブルク・プレラーと呼ばれる移動式遊園地を訪れた。約 2 週間開催され、アトラクションや屋台、ビアガーデンなどが一体となっている。後日、ホストファミリーから、プレラーにはドイツの伝統衣装であるディアンドルを着て訪れる市民も多いと聞いた。普段はあまり着ないということから、日本人が夏祭りに浴衣を着ていく感覚に近いのではないかと思った。昼食後は、アウクスブルク市の消防署を訪問した。はしご車や消防車、救急車だけでなく、さまざまな事例に対応するための車両があり、興味深かった。実際に消防車が出動する場面も見ることができ、一瞬で空気が変わり、緊張感が走ったことが印象に残っている。その後、ホストファミリーと対面し、一緒にアウクスブルク市内を散歩した。ビアガーデンではドイツの料理を味わい、中でも薄い生地でりんごを巻いて焼いたアプフェルシュトゥーデルがとてもおいしかった。家庭によって味が異なり、「自分の祖母が作ったものが一番おいしい」と多くの人が言うほど家庭的な料理だと知った。

２日目



ディーゼルハイン公園や、植物園にある日本庭園の訪問では、長浜市・尼崎市とアウクスブルク市の非常に深い関係が長い年月とても大切にされてきたのだということを改めて強く感じた。日本とドイツで異なる気候や文化にあわせてそれぞれの要素を融合させたように作られた日本庭園は、日本で一般的に知られる庭園とは少し違った魅力もあり、その美しさに感動した。植物園を訪れた後は、その後、世界最古の社会福祉住宅として知られるフッゲライを訪問した。建設時に定められたルールによって家賃が変わらず、現在も年間 88 セントという非常に安い家賃であることに驚いた。また、夜間でも自分の家を見分けられるよう、家ごとに異なる形をしたドアベルが設置されているなど、興味深い工夫も多く見られた。グランドホテルコスモ

ポリスでは、長期滞在者向けの宿泊施設だけでなく、難民の住居やアーティストのアトリエとしても利用されていることに驚いた。ホテル内の家具や備品の多くが寄付によるもので、「使い倒すまで使う」という考え方を大切にしていることも印象に残った。

３日目

シュヴァーベン政府ロココの間で行われたセレモニーの後、シュタットマルクトという市内の市場を見学した。一般的な市場と異なり常設されているため、昔から市民がよく訪れる場所だと聞いた。さまざまな店が並ぶ中、ドイツではパンに様々なものを塗って食べるため、多くの種類のスプレッドが並べられていたことに驚いた。図書館では、楽器や工具、ゲーム機など様々なものが貸し出されており、一つのものをみんなで共有して大切に使うという意識がとても素晴らしいと思い、私も利用してみたいと思った。昼食後は、ドイツの伝統衣装であるディアンドルの試着を行った。時代ごとに流行したデザインの違いや、人々の暮らしに合わせて変化した服のつくりなど、衣装の歴史について学ぶことができた。また、人形劇場の見学では、ミュージアムで展示を見たり、操り人形に実際に触れただけでなく、舞台裏まで見学することができ、とても楽しかった。劇場だけでなく映画でも新作が上映されると聞き、ドイツで人形劇が長く親しまれていることを実感した。夜には日独協会の方々と、伝統料理であるケーゼシュペッツェレをつくった。もちもちとしたパスタのようなもので、生地を専用の調理器具を使って鍋に落とす作業が特に楽しかった。



４日目

この日は、アウクスブルクの市街地とは雰囲気の異なる、のどかで歴史ある建物や家の並んだフュッセンという地域を訪れた。農家のような建物に１週間程度滞在できるホテルもあるそうで、ぜひ泊まってみたいと思った。午前中は、フュッセンにあるアスレチックを楽しんだ。日本では自然の中を歩くことがあまりなかったため、大きな吊り橋や木々の中を歩いてリフレッシュすることができた。また、ノイシュバンシュタイン城では、ルー

ドヴィヒ２世の理想を詰め込んだ、非常に美しいお城に圧倒された。近くにはルードヴィヒ２世が幼少期を過ごしたお城や、透明度が高くエメラルドグリーンのような色の湖が見られ、目に映るものすべての美しさに感動した。その後、私たちはヴィース協会教会を訪れた。質素な外観に対し、内装はロココ様式の非常に豪華な装飾で飾られており、その静けさと荘厳さにとても感動した。夕方には、３組のホストファミリーが伝統衣装のディアンドルを持ち寄り、私たちに試着させてくれた。伝統的なデザインや、オクトーバーフェストで着られるものなど、何種類も着ることができ、とても楽しかった。



５日目

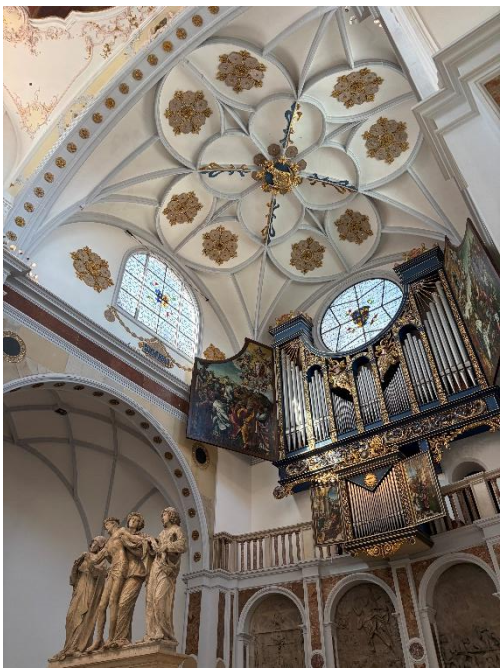
５日目はまず、ＦＣアウクスブルクのWWKアリーナを訪れた。選手や関係者しか入ることのできない場所やグラウンドなど、普段は見ることのできない場所を見学し、いつか実際に試合を観戦したいと思った。次に、ダッハウ強制収容所を訪れた。当時のまま残る建物や資料、写真などを見学し、教科書や勉強だけでは知ることのできない、強制収容所での迫害の実態や悲惨さを感じた。また、人の心理を利用して収容者にさらなる恐怖を与えていたことなど、当時何が行われていたのかを具体的に知り、人が人に対してここまで残酷なことをしていたということに恐怖を感じた。過去の出来事を風化させないために、ダッハウの人々がこの場所で起こったことを私たちに伝えているように、私たちも過去の悲惨な出来事から目をそらさず、過去を学び、学んだことをこれからも伝えていくことが大切だと感じた。午後には、ミュンヘンにあるＢMWの博物館に訪れた。レトロな車から、未来の車までさまざまな展示が非常に興味深く、壁一面に年代別に並べられたバイクの展示は圧巻だった。夜には、ルードヴィヒ２世が暮らした王宮で、フルートとハープによるコンサートを鑑賞した。美しい宮殿での演奏は、現実ではないように感じられるほど美しく、とても感動した。

６日目

６日目は、１５世紀につくられたドイツ最古の給水塔を見学した。アウクスブルク市

は、市の中心である市役所前の通りを境に西側と東側で街の雰囲気が異なり、地面の高さも 8～15m ほど違うと聞いた。街全体に水を届けるため、ポンプや水車、非常に長い管を利用して水を送る給水システムがつくられており、その仕組みがとても興味深かった。その後訪れた職業訓練センターでは、さまざまな職種を学ぶ訓練生の様子を見学した。小売店やクリーニング店など、訓練生が働いていること以外は一般の店と変わらず、実際に地域の人々が利用していることが興味深かった。日本とは教育システムが異なるため、職業訓練という仕組み自体が新鮮で、印象的だった。夕方からは、フェアウェルパーティーを行った。長浜市と尼崎市それぞれで準備していた企画は非常に盛り上がり、たくさんの人に楽しんでもらうことができた。私が担当していた福笑いブースも、最初はうまくいくか不安だったが、多くの人が笑って楽しんでくれていた。使節団のメンバー全員でパーティーを成功させることができ、とても嬉しかった。

７日目



この日は一日ホストファミリーと過ごし、アウクスブルク市内を散歩しながら買い物をした。午前中は雨が降っていたため、日本から持ってきたお土産を紹介したり、私がレポートのテーマとしていた環境への取り組みについて話したりして過ごした。その後、歩いて市街地へ向かい、アウクスブルク大聖堂や聖アンナ教会、ホストマザーが好きだという雑貨店、モーツァルトの父レオポルド・モーツァルトの博物館、スーパーマーケットなどを訪れた。大聖堂と聖アンナ教会では異なる建築様式を見ることができ、大きなステンドグラスやパイプオルガン、天井画が印象的だった。モーツァルト・ハウスでは、レオポルド・モーツァルトの生い立ちが学べたり、作曲を体験できる展示、時代ごとのピアノの音を聞き比べられる展示などがあり、楽しみながら学ぶことができた。スーパーマーケットや雑貨店では、ホストマザーにおすすめのお菓子を教えてもらいながら買い物を楽しんだ。また、ドイツの環境保全の取り組みとして知られるペットボトルのデポジット制度も実際に体験した。使用済みのペットボトルを専用の機械に入れると、デポジット分が記載されたレシートが発行され、買い物の際に利用できる仕組みだった。夜には、ホストマザーと一緒にスーパーで選んだアイスを食べた。ドイツの料理は量が多く、この日は昼食後も二人ともお腹が空かなかったため、夕食の代わりに二人でアイスを食べることにした。ささやかな時間だったが、一緒に過ごした一週

間を通してホストマザーとの距離が縮まったことを実感し、とても嬉しかった。

最後に

　このアウクスブルク市での滞在を通して、ドイツの文化や生活スタイルについて、日本と比較しながらさまざまなことを学ぶことができた。特に、自然を大切にしながら自然とともに暮らす姿や、ものや資源を共有してみんなで大切に使うという意識が印象的だった。また、使節団員として現地を訪れたからこそ、普段の旅行では得られない貴重な経験や学びを得ることができたと思う。そして、訪問先では、多くの方々に温かく迎えていただいた。アウクスブルクの街や文化について説明してくださる際に、嬉しそうに、そして誇らしげに話してくださる方が多かったことがとても印象に残っている。その姿から、自分たちの街や文化を大切にする気持ちがとても伝わってきた。

　一方で、ホストファミリーとの交流では、日本についてまだ知られていないことも多く、自分の文化を伝えたり、そこから会話を広げたりする難しさも感じた。その経験から、国際交流の場では、ただ自分の文化を知ってもらおうと説明するだけではなく、相手の国で知られているものとの共通点を見つけ、置き換えて伝えたりすることが、相手にとって分かりやすく、会話を広げるきっかけになるのではないかと考えた。私自身、今後国際交流の場で誰かを迎える機会では、伝え方を意識して、今回出会った方々のように、自分の地域や文化について、私自身も楽しみながら魅力を伝え、相手にも楽しんでもらえるような交流をしたい。